

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト
最終成果論文（2016年度）

[チャップリンの職業観]

経済学部 3年
飯野友紀
(指導教員：山本武男)

チャップリンの職業観（飯野友紀）

要約

第一章 研究の目的

本論文では、チャールズ・チャップリンの職業観について検証した。チャップリンの代表作である『モダン・タイムス』では、過酷な労働や人間が機械に使われる姿が面白おかしく描写されている。一方、作品中には主人公が失業していても幸せそうに暮らしている場面がある。この作品の中で、何故職があるときよりも失業しているときの方が幸せそうに表現されているのかという疑問を持った。そこで、今回は、チャップリンにとって労働・仕事とはどのような意味を持っていたのかという問題を検証する。更に、チャップリンの作品中に労働と幸福が結びついている職業はあるのかについても調べる。

労働問題が深刻化する今日の私たちの環境は、『モダン・タイムス』の作品中に出てくる工場の労働環境と共通する部分があるかもしれない。チャップリンの作品から今日の労働問題解決への糸口を見つけたい。

第二章 研究方法

研究方法は、チャップリンの全 82 作品中、現存する 81 作品のストーリーや特徴、また職業やその描かれ方を検証するというものである。チャップリンと言うとコメディの印象が強いが、作品中には様々な種類の職業が登場する。全作品の職業を書き出した後は、職種ごとに分類して比較し、どの職業がより幸せそうに描かれているのかを調べる。

第三章 結論

全作品で登場した職業を職種ごとに分類してみた結果、農村での生活・自営農が最も幸せそうに描かれていた。例えば、『犬の生活』という作品は、都会で職に就けずに困っていた失業者である主人公が、飼い犬と歌手の女性と一緒に農村へ行き幸せに暮らすというストーリーである。都会の生活と農村での生活が対比されており、農村での生活がいかに幸せであるかということが伝わってくる。また、反対に『給料日』という作品では、建設現場で働く主人公が、酒を飲んで歌えば苦情が来たり、満員電車で何度試みても乗ることが出来なかったりという都会の生き辛さが表現されている。

何故、農村の方が幸せに描写されているのかという理由は、チャップリンの作品全体から読み取れる。前述のように、都会の生き辛さなどを表現した作品があるのに加えて、多くの

チャップリンの職業観（飯野友紀）

作品の中で一見便利に見えるものの不便さを描写しているシーンが見られる。例えば、『チャップリンの午前一時』という作品では、酔っぱらって帰ってきた主人公が、何回挑戦しても階段を昇ることが出来なかったり、自動ベッドが壊れて思うように動かなかったりする。これは、階段も体調が悪かったり酔っぱらっていたりするだけで簡単には昇れなくなってしまうことや、便利なものでも壊れてしまえば何の役にも立たないばかりか大変不便であるということを示している。

このようにチャップリンの作品からは、都会よりも農村での暮らしの方が理想的であり、物理的にも精神的にも恵まれているという考えを読み取れた。

目次

序論	6
第一章 チャップリンのフィルモグラフィーの流れ	7
第一節 六つの時代分け	7
第二節 第一期 キーストン時代	7
第三節 第二期 エッサネイ時代	9
第四節 第三期 ミューチュアル時代	11
第五節 第四期 ファースト・ナショナル時代	12
第六節 第五期 ユナイテッド・アーチスト時代	13
第七節 第六期 英国時代	14
第八節 フィルモグラフィーのまとめ	15
第二章 チャップリン映画と職業	15
第一節 公務員	15
第一項 警官	15
第二項 消防士	16
第二節 飲食業	17
第一項 ウェイター	17
第三節 清掃業	17
第一項 掃除夫・用務員	17
第四節 スポーツ選手・ショービジネス	18
第一項 ボクシング選手	18
第二項 舞台	18
第三項 映画	20
第五節 輸送業	21
第六節 建築業	21
第七節 芸術家	21
第一項 画家	21
第二項 ヴァイオリン弾き	22
第八節 職人・職人見習い	23
第一項 理髪師	23
第二項 職人見習い	23
第九節 工員	24
第十節 自営農	24
第十一節 職業描写の特徴	26
第三章 チャップリンの農村理想化	27

チャップリンの職業観（飯野友紀）

第一節	モノと戦う.....	27
第二節	モノに吞まれる.....	29
第三節	工業から農業へ.....	31
結論	32
参考資料一覧[引用文献一覧見出し]	33

序論

チャールズ・チャップリンは「喜劇王」として知られ、数々の傑作コメディ作品を残している。それ故彼の作品では、コメディの部分が目立つことが多いが、今回は労働に注目した。チャップリンの作品中には、沢山の職業が登場する。代表作である『モダン・タイムス』（1936年）では、今日のブラック企業さながらに過酷な労働条件や、機械に人間が使われる姿が面白おかしく表現されていて印象的である。また、ストレスで労働者同士がけんかしたり、精神病棟に入ったりする場面もみられる。一方、この作品中にはチャーリーが幸せに暮らす姿も描かれている。それは働いている時ではなく、職を失って偶然出会った少女と一緒に廃屋で暮らしているときである。何故働いている時よりも働いていない時の方が幸せそうに描かれているのであろうか。また、作品中に、労働と幸福が結びついているものがあるか。本研究では、そのような点について検証していく。更にそのような点から、チャップリンにとって、労働・仕事とはどのような意味をもっていたのかを考える。これらを検証することにより、現代の労働問題等の社会問題の解決策への糸口を見つけることが本研究の意義である。

研究方法は、チャップリンの全82作品中、現存する81作品のストーリーや特徴、また職業やその描かれ方を検証するというものである。先行研究においても、このような検証を行ってチャップリンの職業観の全貌を捉えようとする研究は見当たらない。今回の研究において、水川隆夫の『チャップリンと現代』（1998年）と岩崎昶の『チャーリー・チャップリン』（1973年）を先行研究とし、チャールズ・チャップリン本人による『チャップリン自伝』（1966年）を参考文献とした。『チャップリンと現代』ではチャップリンの作品中で描かれている仕事に関して記述されており、『モダン・タイムス』が現代の視点で解説されている。また、チャップリンの作品中でチャーリーが就いている職業を「製造業」、「輸送用機械製造業」、「小売業」、「娯楽業」に分類して論じている。本論では、このような職業の分類の仕方を参考にする。『チャーリー・チャップリン』は、初心者にも分かり易いチャップリンの入門書となっており、『チャップリン自伝』は、チャップリン自身の伝記と作品論である。

本論は、三章からなる。第一章では、チャップリンのフィルモグラフィーの流れを捉える。第二章では、作品中に登場する職業を職種別に分類し、それらがどのように描かれているかを検証する。第三章では、第二章で分類した職業の中で最も幸福感と結びついて描かれていた職種である自営農に注目し、何故その職業がそのように描かれていたのかを考える。

第四章 チャップリンのフィルモグラフィーの流れ

第一節 六つの時代分け

第一章では、前述のように 1914 年のデビュー作からチャップリンのフィルモグラフィーの流れを捉える。

一般的に、チャップリンの作品は時代毎に六つに分けられる。デビューからアメリカを去るまでのハリウッド時代が五期に分けられ、その後英国で製作した時代が第六期である。ハリウッド時代の五期は、当時の所属会社の名前から、第一期から順に、キーストン時代（1914 年）、エッサネイ時代（1915 年～1916 年）、ミューチュアル時代（1916 年～1917 年）、ファースト・ナショナル時代（1918 年～1922 年）、ユナイテッド・アーチスト時代（1923 年～1953 年）と呼ばれる。そして第六期は、英国時代（1957 年、1967 年）である。

以下に第一期から順に、その時代の作品の特徴を検証していく。

第二節 第一期 キーストン時代

第一期は、キーストン時代（1914 年）である。キーストン時代の作品一覧は以下の表 1 に示す。キーストン時代の特徴として、1 年間という短期間で 36 本もの作品が公開されたことが挙げられる。このような「大量生産主義」は、他の会社での製作速度と比較するとチャップリン自身の希望ではなく、キーストン社の方針であったと推測できる。

チャップリンの俳優としてのデビュー作は、ヘンリー・レアマン監督の『成功争い』

（1914 年 2 月 2 日公開¹）であり、主役を務めている。本作品では、新聞記者のスクープ記事を盗んで、自分が新聞社に売り込むという詐欺師のような男を演じている。2 作目のヘンリー・レアマン監督の『ヴェニスの子供自動車競走』（1914 年 2 月 7 日公開）では、初めて「チャーリー」が登場する。「チャーリー」は、チョビ髭を生やし、きつめの上着と大きいズボンにドタ靴を履き、帽子とステッキを持っているという特徴を持ち、チャップリンのほとんどの作品に登場する有名なキャラクターである。チャップリンが楽屋にあった衣装の中から適当に合わせて着てみたところ、キーストン社の監督・俳優であるマック・セネットに好評で採用され、「チャーリー」が誕生した。なお、3 作目の『メイベルのおかしな災難』（1914 年 2 月 9 日公開）は、『ヴェニスの子供自動車競走』よりも先に撮影が始まったとされ、最初に「チャーリー」が登場した作品は公開順とは逆であると言われているが²、いずれにしてもチャップリン出演作の早期から「チャーリー」は登場している。

¹ 本論文中の作品の公開日の記述の内、日付まで含まれているものは大野裕之『CHAPLIN THE ROOTS』（ハピネット、2012 年）を参照している。

² 同上、21-22 頁参照。

キーストン時代の作品の多くは、チャップリン自身が監督をしていない。実際にチャップリンが監督したのは、36本の作品中16本である。その為、スタッフたちと意見が衝突することも度々あり、『チャップリン自伝』の中には、チャップリンがデビュー作『成功争い』で工夫した多くの演技をヘンリー・レアマン監督にカットされたことに対する不満も書かれている³。しかし、チャップリンに対する観客の反応は良く、その結果スタッフ達にも認められていくことになる。

チャップリンの監督としてのデビュー作は、公式には『雨に降られて』（1914年5月4日公開）だとされているが、大野裕之はジョセフ・マダン監督の『恋の20分』（1914年4月20日公開）を実質的な初監督作品であるとしている⁴。チャップリンの監督作品は、他の監督の作品と比較しても、ストーリーや表現において差は見られない。キーストン時代の作品では、多くの場合公園やホテル、映画館、映画撮影所、カフェなどの都会生活の場所が舞台となっており、そこで「悪漢⁵」であるチャーリーが警察に追われるというストーリー展開が定番である。警察は、キーストン時代の喜劇の代名詞的存在でもあるキーストン・コップで、警察らしい強さが見られないのがその特徴である。

³ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳（新潮社、1966年）160-161頁参照。

⁴ 大野裕之、『CHAPLIN THE ROOTS』（ハピネット、2012年）、33-34頁参照。

⁵ 岩崎昶『チャーリー・チャップリン』（講談社、1973年）56頁参照。

表 1 キーストン時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
キーストン	成功争い	職業不詳
#	ヴェニスの子供自動車競走	職業不詳
#	メイベルのおかしな災難	職業不詳
#	泥棒を捕まえる人	警察
#	夕立	職業不詳
#	チャップリンの活動狂	職業不詳
#	タンゴのもつれ	職業不詳
#	アルコール先生お好みの気晴らし	職業不詳
#	痛ましの恋	独身のブルジョワ紳士
#	幻燈会	職業不詳
#	メイベルの身替り運転	職業不詳
#	恋の20分	スリ
#	チャップリンの総理大臣	カフェのボーイ
#	雨に降られて	職業不詳
#	多忙な一日	職業不詳
#	命取りの木桶	職業不詳
#	彼女の友人は詐欺師	(フィルムが現存しない)
#	ノックアウト	ボクシングの試合のレフェリー
#	メイベルの多忙な一日	職業不詳
#	メイベルの結婚生活	職業不詳
#	笑いのガス	歯医者の小間使い
#	チャップリンの道具方	寄席の道具方
#	チャップリンの画工	自称画家
#	リクリエーション	職業不詳
#	男か女か	チャールズ・チャップリン
#	チャップリンの新しい仕事	失業者、怪我人の世話をするアルバイト
#	両夫婦	職業不詳の中産階級
#	新米用務員	用務員
#	恋の痛手	職業不詳
#	チャップリンとパン屋	カフェのボーイ、臨時のパン職人
#	アルコール自動車競走の巻	職業不詳
#	アルコール先生ピアノの巻	ピアノ運搬業者
#	他人のコート	職業不詳、家庭を持っている
#	夫婦交換騒動	職業不詳、配偶者がいる
#	アルコール先生原始時代の巻	失業者
#	醜女の深情	詐欺師

第三節 第二期 エッサネイ時代

第二期は、エッサネイ時代（1915年～1916年）である。エッサネイ時代の作品一覧は、以下の表2に示す。チャップリンがキーストン社からエッサネイ社へと所属会社を変えたのは、自伝によると給料や製作面での好条件を求めた結果であった⁶。エッサネイ社では、報酬もより高く、製作の自由も与えられた。

エッサネイ時代には、16本の作品に出演しており、その内監督主演作は15本である。唯一の他の監督作品は、B.M.アンダーソン監督の『彼の更生』（1915年5月7日公開）である。しかし、最後の2作品である『チャップリンのカルメン』（1916年4月16日公開）と『三つ巴事件』（1918年8月11日公開）は、チャップリンが次のミュージカル社に移籍した後、未完成のままであったフィルムをエッサネイ社側が勝手に完成させて公開した為、チャップリンは自作として認めていない。

⁶ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳 新潮社、1966年、177-178、185-188頁参照。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

エッサネイ時代の特徴として、製作のペースがキーストン時代よりも緩やかであることが挙げられる。それは、それぞれの期間と作品数を比較すれば明らかである。

また、この時代には、以降チャップリンの作品で重要な役割を果たすエドナ・パーヴィアンスという女優との出会いがあった。彼女は、第二期のエッサネイ時代から、第五期のユナイテッド・アーチスツ時代の第1作目までチャーリーの恋人役を中心にヒロインを務めた。作中でも「エドナ」という名をそのまま使っている。キーストン時代にはチャーリーは「女好き」として描かれ、男女のいざこざが主だったのに対して、エドナとの出会いにより、ヒロインが登場し、チャーリーとエドナの恋愛心理が、喜劇の中に描き込まれるようになった。『チャップリンの拳闘』（1915年3月11日公開）では、ボクシング・ジムの所長の娘であるエドナと浮浪者からボクサーになったチャーリーが会って恋に落ち、『チャップリンの駆落』（1915年4月1日公開）では、恋人同士のチャーリーとエドナがエドナの父親の反対を押し切って駆け落ちし、更に『チャップリンの船乗り生活』（1915年10月4日公開）では、チャーリーが拉致されて船で働かされると、エドナも船に潜り込んで一緒に脱出するというストーリーが描かれている。これらは、どれもハッピーエンドである。一方、『チャップリンの失恋』（1915年4月11日公開）や『チャップリンの掃除番』（1915年8月9日公開）では、チャーリーが失恋をするというストーリーも描かれている。

このようにエッサネイ時代は、自由なペースで製作をしたと同時に、恋愛の喜びや悲しみの感情を作品で初めて描いた時代である。

エッサネイ時代の作品では、キーストン時代同様に公園やホテル、ボクシング会場なども舞台となっているが、それに加えて船や農場も登場する。特に、農場が舞台として登場する『チャップリンの失恋』は、本論文で注目すべき作品である。この作品は、ある農村を訪れた放浪者のチャーリーが、3人の泥棒に襲われていた農家の娘エドナを助け、とても親しくなるが、後に彼女には恋人がいることを知ってこの地を去るというストーリーである。この作品での農村の登場は、これまでの主要な舞台であった都会とは対照的であり、またチャップリンが初めて本格的な失恋を描いた作品の舞台に農村を選んだのは注目すべき点である。これ以降、チャップリンの作品では、人が自然とともに理想的な生活を求める場所として農村が登場することになる。

表 2 エッサネイ時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
エッサネイ	チャップリンの役者	求職者、エキストラ
//	アルコール夜通し転宅	職業不詳
//	チャップリンの拳闘	失業者、ボクサー
//	アルコール先生公園の巻	スリ
//	チャップリンの駆落	職業不詳
//	チャップリンの失恋	失業者、農村の手伝い
//	アルコール先生海岸の巻	職業不詳
//	彼の更生	職業不詳
//	チャップリンの仕事	壁紙職人見習い
//	チャップリンの女装	職業不詳
//	チャップリンの掃除番	銀行の掃除夫
//	チャップリンの船乗り生活	拉致されて働かされる船員
//	チャップリンの寄席見物	職業不詳
//	チャップリンの悔悟	元囚人
//	チャップリンのカルメン	税関吏
//	三つ巴事件	使用人

第四節 第三期 ミューチュアル時代

第三期は、ミューチュアル時代（1916年～1917年）である。ミューチュアル時代の作品一覧は、以下の表3に示す。ミューチュアル時代は、12本の作品の監督・主演をしている。製作のペースは一層緩やかになったが、一作一作の個性がより際立ち、完成度も高くなっている。

ミューチュアル時代の特徴として、チャーリーが職業に就いて働いている作品が多いということが挙げられる。例えば、消防士や仕立屋の見習い、質屋の店員、カフェのウェイター、警官など様々な職業が登場する。これまでの時代では、チャーリーは職業が不詳であったり浮浪者の役であったりする作品が多く、貧困のイメージを持ちやすかったが、この時代になるとチャーリーのイメージの変化が見られる。これは、当時の映画の客層に貧困層が多く、デビュー以来そのような客層の共感を得ることを意識してチャーリーのキャラクター設定をしてきたが⁷、チャップリンの名声上がるにつれ、客層にも変化が見られ、より広い客層に訴えかけるべく、様々な職業を登場させたと考えられる。

また、この時代の作品では、チャーリーがエドナに対してヒーローのような立場で描かれていることが多い。キーストン時代に「女好き」として描かれたチャーリーは、エッサネイ時代にはエドナと恋をするようになり、更にミューチュアル時代にはエドナを救うヒーローとして描かれている。例えば、『チャップリンの消防士』（1916年6月12日公開）では、消防士であるチャーリーが建物の壁を這い上がってエドナを助けに行き、『チャップリンの

⁷ 岩崎昶『チャーリー・チャップリン』（講談社、1973年）70頁参照。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

放浪者』(1916年7月10日公開)では、チャーリーが拉致された先でこき使われていたエドナを救い出し、更に『チャップリンの移民』(1917年6月17日公開)では、アメリカへ向かう船の中で、お金を盗まれたエドナ親子にそっとお金を与えて助ける。これらはすべてハッピーエンドである。『チャップリンの冒険』(1917年10月22日公開)では、最後に脱獄囚であることがばれてしまい、ハッピーエンドにはならないが、脱獄囚のチャーリーが海でおぼれているエドナとその母を助ける。このように、職業の違いに関係なく、多くの作品でエドナを助けるヒーローのようなチャーリーが見られる。

表 3 ミューチュアル時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
ミューチュアル	チャップリンの替玉	俄の店長
//	チャップリンの消防士	消防士
//	チャップリンの放浪者	ヴァイオリン弾き
//	チャップリンの午前一時	ブルジョワ
//	チャップリンの伯爵	仕立て屋の見習い、なりすまし伯爵
//	チャップリンの質屋	質屋の店員
//	チャップリンの舞台裏	映画撮影所の大道具、臨時の俳優
//	チャップリンのスケート	カフェのウェイター
//	チャップリンの勇敢	浮浪者、警官
//	チャップリンの霊泉	職業不詳
//	チャップリンの移民	職業不詳、移民
//	チャップリンの冒険	脱獄囚

第五節 第四期 ファースト・ナショナル時代

第四期は、ファースト・ナショナル時代(1918年～1922年)である。ファースト・ナショナル時代の作品一覧は、以下の表4に示す。ファースト・ナショナル時代には、9本の作品が製作され、後に映画史上の傑作と呼ばれるような作品が含まれている。また、本論文でポイントとなる都会での生活と農村での生活の双方がそれぞれ作品に含まれている。

この時代の作品の内、『犬の生活』(1918年公開)と『サニーサイド』(1919年公開)は、本論文において大変重要な意味を持つ作品である。『犬の生活』は、失業者であるチャーリーが、飼い犬が見つけた大金をもって、酒場で出会った歌手のエドナと一緒に農村へ行き、農業をしながら幸せに暮らすというストーリーであり、『サニーサイド』は、田舎でチャーリーとエドナが交際しているところに、ある日都会の紳士が現れてエドナと仲良くなってしまうが、結局エドナはチャーリーを選ぶというストーリーである。これらの2作品から、チャップリンが都会よりも、農村や田園をより人間らしく暮らせる理想の場所として捉えていることが読み取れる。

『一日の行楽』(1919年公開)は、チャーリーの家族がT型フォードに乗ってドライブに出て休日を楽しむというストーリーであるが、先ずT型フォードのエンジンをかけるのに苦勞し、遊覧船で船酔いし、更に帰り道の交差点では交通整理のために足止めを食らうと

チャップリンの職業観（飯野友紀）

いうように都会の生活のままならなさが描かれており、便利なように見えて実は不便であるという点が表現されている。また、『給料日』（1922年公開）では、建設現場で働くチャーリーの生活の中で、酒を飲んで歌えば苦情が来たり、満員電車で何度試みても乗ることが出来なかったりという都会の生き辛さを表す描写が見られる。

ファースト・ナショナル時代の作品では、都会や農村に加えて戦場も舞台となっており、広い範囲で人々の生きる姿が描かれている。そして、時代の変化とともに急速に進む都市化への批判的な視点も見られる。

表 4 ファースト・ナショナル時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
ファースト・ナショナル	犬の生活	浮浪者、自営農
//	ぎづな	職業不詳
//	担え銃	陸軍の兵士
//	サニーサイド	農村のホテルの従業員
//	一日の行楽	職業不詳
//	キッド	浮浪者、ガラス修理
//	のらくら	職業不詳
//	給料日	大工
//	偽牧師	脱獄囚、偽牧師

第六節 第五期 ユナイテッド・アーチスツ時代

第五期は、ユナイテッド・アーチスツ時代（1923年～1953年）である。ユナイテッド・アーチスツ時代の作品一覧は、以下の表 5 に示す。

この時代には、チャップリンの代表的な長編作品が名を連ねる。この時代の特徴として、外形的には全てが長編であり、一作一作の間が数年間ずつあることから、それぞれの作品に十分な時間をかけて製作しているということが挙げられる。また、前述のように、この時代の1作目である『巴里の女性』（1923年公開）を最後に、これまでヒロインを演じてきたエドナが出演しなくなった。更に、映画界に大きな変化があり、1929年に世界最初のトーキー映画が出現し、チャップリンもその変化への対応として、『街の灯』（1931年公開）、『モダン・タイムス』（1936年公開）で部分的にトーキーを取り入れ、『チャップリンの独裁者』（1940年公開）では本格的にトーキーに移行した。それに伴って、これまで長年登場していた「チャーリー」のスタイルの主人公は、『チャップリンの独裁者』を最後に登場しなくなる。

『巴里の女性』にチャップリンは出演していないが、田舎で暮らしていた主人公の女性がパリに憧れて派手な生活を送り、結果的に田舎暮らしの幸せに気が付き、田舎に戻って暮らすというストーリー展開になっており、都会と農村の生活を鮮明に対比しつつ精神的な幸福感について説いている。特にラストのシーンで、パリで付き合っていた男女がそれぞれ車と馬車に乗ってすれ違うシーンは、大変印象的である。また、冒頭でも述べたように、『モ

『ダン・タイムス』は、本論文を執筆する動機となった作品であり、労働と幸福についての問題提起を含み、現代社会の課題をも表現している。

表 5 ユナイテッド・アーチスト時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
ユナイテッド・アーチスト時代	巴里の女性	画家
//	チャップリンの黄金狂時代	冒険家
//	サーカス	芸人、使用人
//	街の灯	浮浪者、掃除夫、賭けのボクサー
//	モダン・タイムス	工場労働者、カフェの芸人
//	チャップリンの独裁者	床屋、独裁者
//	チャップリンの殺人狂時代	犯罪者
//	ライムライト	芸人

第七節 第六期 英国時代

第六期は、英国時代（1957年、1967年）である。英国時代の作品一覧は、以下の表6に示す。『モダン・タイムス』が一部から「共産主義的」とみなされ⁸、戦後の冷戦期にはそういった誤解に基づく風当たりが日増しに強くなった為、チャップリンは家族とともにアメリカを去り、スイスに定住した。英国時代の作品は、『ニューヨークの王様』（1957年公開、アッティカ・フィルム制作）と『伯爵夫人』（1967年公開、パインウッド・スタジオ制作）の2作品である。

『ニューヨークの王様』では、チャップリンが、自国で革命が起こってアメリカに自由を求めて亡命してきた欧州の国の王様を演じている。王様は意図せずしてテレビのコマーシャルに出演させられ、王様が訪問した小学校で出会った少年は、両親が共産主義者として捕まってしまう。この作品では、アメリカを「追放」されたチャップリンの目から見た、商業価値を中心に展開し、一方で思想・言論の自由が制限されているアメリカ社会の姿を現している。

『伯爵夫人』は、チャップリンが監督した最後の作品であり、チャップリン作品唯一のカラー作品でラブ・コメディである。チャップリンの俳優としての出演は、作品中に2回のみである。ヒロインのナターシャは亡命先の上海で両親を亡くし、香港に渡るが、そこでの生活から抜け出すために、アメリカ行きの豪華客船に忍び込む。出航前夜に出会い、彼女が頼った外交官オグデンは、離婚が囁かれる妻がいる一方で、ナターシャと相思相愛の仲になり、迷いながらも結局ナターシャを選ぶというハッピーエンドのストーリーである。

⁸ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳（新潮社、1966年）448頁参照。

表 6 英国時代の作品一覧（公開順）

時代	作品名	主要人物の職業
英国時代	ニューヨークの王様	王様
//	伯爵夫人	外交官

第八節 フィルモグラフィーのまとめ

これまで第一期から第六期まで時代毎に見てきた。チャップリン作品の初期に初めて登場した「チャーリー」というキャラクターは、キーストン時代には、人を殴ったり、人の上を歩いたりする所謂「悪漢」であり「女好き」であった。次に、エッサネイ時代にエドナ・パーヴィアンスという女優と出会い、恋愛が描かれ始める。そこから、ミューチュアル時代になるとチャーリーが「ヒーロー」となってエドナを助けるというストーリーになる。更に、ファースト・ナショナル社の時代になると、チャーリーは「悪漢」でも「ヒーロー」でもなく、失業に苦しんだり、恐妻家だったりする、観客一般と人間としての悩みを共有する「人」になる。チャップリンのヒューマン・コメディイはこの時代に生まれた。次のユナイテッド・アーチスト時代には『チャップリンの黄金狂時代』や『モダン・タイムス』、『チャップリンの独裁者』などで社会の問題や「便利な道具」の不便な面を喜劇で風刺した。英国の伝統である戯画、カリカチュアを映画で行ったとも言える。笑いの中にも様々な角度から人間性や社会問題を表現したチャップリンは、現代社会を戯画化し、その問題点を今日の我々にまで突きつけている。

第五章 チャップリン映画と職業

第一章で見てきたように、チャップリンの作品には様々な職業が登場する。しかし、全ての作品を通して、失敗や人間関係のトラブルの場面が随所に見られ、チャーリーが真面目に働いている姿はめったに見られない。

第二章では、チャップリンの映画と職業と題して、チャップリンの作品中に登場する職業を職種ごとに分類して検討し、チャップリンの職業観を探る。以下に、公務員、飲食業、清掃業、スポーツ選手・ショービジネス、輸送業、建築業、芸術家、職人・職人見習い、工員、自営農という10個に分類して、職業ごとの描かれ方を見ていく。

第一節 公務員

第一項 警官

チャップリンの職業観（飯野友紀）

キーストン時代の『泥棒を捕まえる人』でチャーリーが初めてはっきりとした職業の役で登場する。この作品では監督のフォード・スターリングが主演を務めており、チャップリンは脇役の警官を演じていて、チャーリーの時と同じようなチョビ髭を生やしている。登場する場面は少ないが、警察は弱い存在として描かれている。このようにキーストン時代の作品に度々登場するキーストン・コップはどこか間が抜けていて、追いかけている相手をなかなか捕まえられない。チャップリンの作品では、ユナイテッド・アーチスト時代の『街の灯』までこのキーストン・コップを想起させるような場面が見られる。チャップリンはより良い条件を求めてキーストン社から他社に移籍したが、キーストン時代に確立され、人気を博した警官とチャーリーの追い駆けっこの構図は、チャーリーが登場する最後の頃の作品まで大切にされている。チャーリーの原型が生まれたキーストン時代のアイデアは、キーストン社を離れた後にも生かされているのである。

次に、ミューチュアル時代の『チャップリンの勇敢』で再び、今回は主役のチャーリーが警官という職業に就いている。チャーリーは、治安が悪い地区の巡査となり、頭を使ってその地区を仕切っている大男を倒す。この作品には、身体の大きさでは相手の方が勝っていても、知恵を絞って勝利するという勇敢さが描かれている。

これらから分かるように、チャーリーが警官に追いかけられるときには、警官は弱い存在として面白おかしく表現されている一方、チャーリーが警官を演じるときには、体は小さくても、身のこなしと頭を使って悪漢を倒している。警官は庶民と接する立場にある権力の代表のような存在であったので、作品中では現実よりも弱く描くことで、けして身分が高くなかったとされる当時の観客たちを相対的に強くなったような気持ちにさせ、勇気を与えていたものと考えられる。また普段はそのように警官よりも強いチャーリーを応援している観客でも、チャーリーが警官になった時だけは、警官に強くあってほしいと望んでしまうほど、チャーリーは観客の気持ちを掴んでんでいたのだろう。

第二項 消防士

『チャップリンと消防士』では、チャーリーが消防士として登場する。朝集合のベルが鳴り、他の消防士が着替えをして整列していてもチャーリーだけまだ寝ていたり、ベルの音を聞き分けられなかったりと真面目に働いていない。しかし、自分が一目惚れをした女性を助けるためであったら、勇敢に壁を登る。この部分は、消防士の仕事のかっこよさを強調し、勇敢に人を助けるというヒーローのような存在として描かれていると考えられる。

第二節 飲食業

第一項 ウェイター

キーストン時代の『チャップリンの総理大臣』では、チャーリーは貧民街のレストランのウェイターをしているが、ある国の総理大臣だと偽ってパーティーに出席する。また、ミュージカル時代の『チャップリンのスケート』でも、チャーリーはレストランのウェイターをしているが、スケート場で催されるパーティーに出席し、偽って貴族を名乗る。この2作品からレストランでウェイターをしているチャーリーは、自分を大きく見せようとしていることが分かる。つまり、チャップリンにとってウェイターという職業は胸を張れるものではなかったのかもしれない。

第三節 清掃業

第一項 掃除夫・用務員

キーストン時代の『笑いのガス』では、チャーリーは歯医者の小間使いをしている。モップで床を掃除する時に、そのモップを肩に担ぐため、モップの先が客の顔に当たってしまう。一方、美人の女性客に対しては掃除などそっちのけでアプローチする。このような「女好き」というのはキーストン時代の特徴の1つであった。またチャーリーは自分より年下の同僚に対して偉そうに振る舞い、暴力をふるう。

続いて、キーストン時代の『新米用務員』では、チャーリーは用務員をしており、エッサネイ時代の『チャップリンの掃除番』では銀行の掃除夫をしている。どちらの作品でも掃除夫として真面目に働いていない。実際に『自伝』にも少年時代に掃除夫を不真面目にしていた解雇されたことが記されている⁹。『新米用務員』では、掃除をしているときに建物の窓から水の入ったバケツを落としてしまい、ちょうど下にいた社長に当たってチャーリーはクビになる。しかしその後、金庫からお金を盗もうとした社員に勝ち、ヒーローとなる。『チャップリンの掃除番』でも、ただの掃除夫であったチャーリーが銀行を襲ってきた強盗と戦ってエドナを助けてヒーローになるというストーリーである。しかし、最後にこれは居眠りしていたチャーリーの夢であったことが分かる。後者は、ヒーローになりたいという願望の表れではあるが、この2作品から、チャーリーは掃除夫としては活躍出来ていなくても、他のことでヒーローになりたいという願望を持っていたことが分かる。また、チャップリンにとって清掃業は、かつて実際に自分が経験したことがあり、表現し易く、親しみのある職業

⁹ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳（新潮社、1966年）59頁。

であったものと思われる。

第四節 スポーツ選手・ショービジネス

第一項 ボクシング選手

チャップリンの作品中には度々ボクシングが登場する。最初にボクシングが登場するのはキーストン時代のマック・セネット監督の『ノックアウト』（1914年6月11日公開）である。この作品中で、チャーリーは主役ではなく、ボクシングの試合のシーンでレフェリーとして登場する。細かく動き回ったり、自分から倒れたりする動きが印象的である。

続いて、チャーリーがボクシングの選手として初めて登場する作品は、エッサネイ時代の『チャップリンの拳闘』（1915年3月11日公開）である。失業者チャーリーはボクサー犬とともに暮らしているうちに、ボクサーになろうと考え、ボクシング・ジムの門を叩く。試合ではチャンピオンに挑戦し、愛犬のボクサー犬が乱入してチャンピオンの尻に噛みつきたりしたことからチャーリーが勝利する。この作品ではチャーリーが試合に向けて、様々な器具を用いてトレーニングを積む様子が描かれていて、チャップリンのボクシングへのこだわりが感じられる。チャーリーがもう一度、ボクサーとして試合をするのはユナイテッド・アーチスト時代の名作『街の灯』（1931年公開）である。チャーリーは盲目の貧しい街の花売り娘の生活費と目の手術代を稼ぐ為に、賭けのボクシングに出場する。レフェリーの後ろに隠れて相手のパンチを避け、相手と向き合った時にはクリンチを繰り返すといった工夫をするが力尽きて破れる。チャップリンの初期の頃の作品では、チャーリーが日常的に人を殴ったり、蹴ったり、倒れた人の上を歩いたりする場面が多くみられる。これらはあくまでも喜劇の手法として表現されているが、人が生きていく上で欠かすことのできない闘争本能を象徴的に表しているとも考えられる。

第二項 舞台

チャップリン自身が経験した職業のうち、ショービジネスはその人生の大半を占めており、馴染みがあると同時に良く理解できている業界であった。したがって、舞台と映画の場面は作品中に何度も登場する。

まず、初めて舞台を描いた作品ではキーストン時代の『チャップリンの道具方』（1914年

8月1日公開）である。チャーリーは舞台の裏方をしている。同僚の老人に対して、殴ったり、蹴ったり、倒れたらその上に乗ったりと容赦なく暴力を振るっている。一方、力自慢の芸人から女芸人を介してタイトを繕うように命じられると、チャーリーはそれを雑巾として使用して反抗し、また女芸人が演じているときに舞台に投げ返す。このように自分より弱い者に対しては傲慢な態度をとり、抑圧的な態度で向かってくるものには精一杯の抵抗をする。

エッサネイ時代の『チャップリンの寄席見物』（1915年11月29日公開）、『犬の生活』（1918年公開）、『サーカス』（1928年公開）、『モダン・タイムス』（1936年公開）、『ライムライト』（1953年公開）などでも舞台のシーンが登場する。『チャップリンの道具方』ではチャーリーがホースで舞台にも観客にも水をまき散らすところで終わるのと同様、『チャップリンの寄席見物』は、チャップリン演じるラウディ氏が舞台の火を使った芸を見てホースで水を撒いて消そうとし、それを見て始めは喜んでいた一階の観客も水浸しになるというシーンで終わる。このようなホースによる放水は英国時代の『ニューヨークの王様』でも見られる。非米活動委員会に共産主義者の嫌疑をかけられたチャップリン扮する国王は、出廷前にエレベーターで何気なく消防用のホースの先に指を入れておくと抜けなくなってしまう。仕方なくホースをつけたまま入廷するが、警備員が火事と勘違いし、ホースを水道につないで水を出した為、法廷が水浸しになる。裁く者と裁かれる者といった線引きを帳消しにする場面で、社会の上辺の立場を洗い流せば人間は一緒、というチャップリンのメッセージが感じられる。

『犬の生活』では失業者チャーリーと一緒に暮らす犬と共に入った酒屋に舞台があり、エドナが古い流行歌を歌って観客を感動させている。しかしエドナは、店側から十分な報酬は支払われていない。ここには当時の女芸人の立場の厳しさが伺われる。『サーカス』では、チャーリーが偶然入り込んだ公演中のサーカス団のテント内で観客の笑いを取ったことから、支配人がチャーリーを正式に雇うかどうかを決める為、オーディションを課す。手本を示す道化たちの芸を見て大笑いするチャーリーだが、自分がやってみると、全く笑わせることが出来ない。オーディションに落ちたチャーリーだったが、裏方として雇われ、偶然ロバに追いかけてサーカス会場に逃げ込んだことで観客から喝采される。支配人はロバにチャーリーを追わせ、逃げる姿を観客に見せて笑わせるようになる。この作品では、人の芸を笑うのは簡単だが、人を笑わせるのは難しいことなのだということが示されている。

『モダン・タイムス』でチャーリーは、工場でのベルトコンベア・システムで機械のような単純作業の仕事を続けているうちに、仕事をしていないときまで仕事と同じような手

チャップリンの職業観（飯野友紀）

の動きをするようになり、遂に精神の平衡を失って精神病院に入る。退院して出会った貧しい少女と協力して生活していくうち、少女がカフェのダンサーとしてスカウトされ、チャーリーも歌手として雇われることになる。この場面は芸能の才能が認められた例を表している。『ライムライト』では、嘗て有名だったものの落ちぶれてしまった芸人が、自殺未遂を図ったバレリーナの娘を助け、励まして舞台上に復帰させ、彼女は出世する。カルヴェロにも復活のチャンスが訪れるが、道化役としての評判は良くない。カルヴェロはやがて身をくらし、辻の音楽師になる。

このように『犬の生活』、『サーカス』、『モダン・タイムス』、『ライムライト』で描かれたショービジネスの世界はチャップリンが体験してきた現場を基にして描かれていると思われる。現実味があると同時に、現実的な厳しさも伝わってくる内容になっている。

第三項 映画

キーストン時代のジョージ・ニコルズ監督の『チャップリンの活動狂』（1914年3月2日公開）で、初めて映画撮影所が舞台として登場する。しかしこの作品でチャーリーは職業不詳であり、映画館でキーストン社の映画を観ているうち、作品のヒロインに恋をしてスタジオに侵入したり、撮影現場に乱入したりして騒動を巻き起こす。最後にチャーリーは消火用のホースで放水されるが、後に『チャップリンの寄席見物』や『ニューヨークの王様』でも登場する放水による幕切れは、ここから始まる。

同じキーストン時代の『男か女か』（1914年8月17日公開）の舞台はキーストン・スタジオで、主演のチャップリンはチャップリン自身を演じている。チャーリーの扮装になったチャップリンは撮影に入るが、監督の指示に従わずトラブルを起こし、解雇される。チャップリンは仕返しをしようと企て、女装をして再度現れると、女性と思い込んだ監督が見惚れて口説こうとする。そこで実はチャップリンだという姿を見せると、監督をはじめとするスタッフたちと抗争になる。煉瓦の投げ合いをしながら後退していくチャップリンは井戸に落ちてしまう。チャップリンの作品には、井戸、公園の池、海、風呂など、水に落ちて終わる作品も多い。こういったラストは、人物を水に落とし、陸の上のようにやり合うことが出来なくすることで、それまでのドタバタ喜劇に終止符を打つ役割があると思われる。

エッサネイ時代の『チャップリンの役者』（1915年2月1日公開）では、映画撮影スタジオで道具方として働くチャーリーが臨時で俳優として採用され、泣くシーンで女優のスカートを涙を拭いて、勢いでスカートを脱がしてしまったり、セットの太い円柱を倒して監督を下敷きにしたりして騒動を巻き起こす。ミューチュアル時代の『チャップリンの舞台裏』

チャップリンの職業観（飯野友紀）

（1916年11月13日公開）ではチャーリーが映画撮影所の道具方として登場する。道具方の上司がほとんど働いていないためチャーリーが真面目に仕事している珍しい場面が見られる。こうしてみると、映画関係の仕事をしているチャーリーは他の職業よりも生き生きと描かれている。チャップリン自身が大きな成功を収めた業界であり、自ずと楽しい雰囲気になったとも考えられる。

第五節 輸送業

キーストン時代の『アルコール先生ピアノの巻』では、チャーリーはピアノの運送業者をしている。ここでも、真面目に働いている姿は見られない。ピアノの配達と回収を同時に頼まれたために、配達と回収の家を逆にしてしまうという失敗ぶりである。また、ピアノを運ぶという職業柄、チャーリーは同僚と2人で一緒に働いているが、連携を上手くとることが出来ない。チャップリンの作品の中では、チャーリーが誰か他の人と仲良く仕事をしたりすることはなく、常に孤独であり、異性のパートナーは現れるが、同性との友情などは見られない。チャップリンは孤高の天才と言われており、本人にもその自覚はあったものと考えられ、そういった意識が作品に現れたものと考えられる。

第六節 建築業

ファースト・ナショナル時代の『給料日』では、チャーリーは建設工場の現場で働いている。スコップで穴を掘るシーンでは、少しずつしか掘り出さないことを親方に指摘されると、多く掘り出した砂を放って後ろの親方に向け、下から放り上げられたレンガを掴んで並べる作業をするシーンでは、親方が昼食の合図をすると、すぐに手からレンガを離し、親方の頭に落とす。このように、ただ上司に服従するのではなく、様々な方法で上下関係を切り崩すチャーリーの姿が見られる。また、レンガを掴む動きがとても優雅に表現されており、建築という仕事の違うイメージを与えようとしたのかもしれない。一方、昼食を食べる際にも作業道具を使っているシーンが印象的で、道具の便利さを表すと共に、何にでも道具を使おうとする現代社会への問題提起とも捉えられる。

第七節 芸術家

第一項 画家

チャップリンの職業観（飯野友紀）

キーストン時代の『チャップリンの画工』（1914年8月10日公開）で、チャーリーは元画家の男を演じている。もともとはモデルの女性に恋をしていたが、その女性はチャーリーの友人と結婚してしまう。バーでその失恋話をすると、可哀想に思った人達が奢ってくれたのだが、店の床に描いた絵があまりにひどく、作り話だと思われたため奢ってもらった客に店から追い出される。

ユナイテッド・アーチスト時代の『巴里の女性』（1923年公開）は、田舎に住んでいる若い男女がパリへ駆け落ちしようとする話である。パリへ向かう日に、男は駅に彼女を待たせて荷物を取りに帰ると、父親が倒れてしまう。彼女に電話で行けなくなったことだけを伝えると、彼女は彼に裏切られたと勘違いし、一人でパリへと旅立つ。パリで彼女は富豪の愛人となるが、やがてパリに来た彼と再会する。その彼の職業が画家である。二人はよりを戻しかけるが、富豪との間で三角関係が生じてしまい、男はピストルで自殺するという悲劇に終わる。これらの作品に見られるように、チャップリンの作品の中での画家の役割は、悲しい恋の主人公である。

第二項 ヴァイオリン弾き

ミュージュアル時代の『チャップリンの放浪者』（1936年7月10日公開）では、馬車で移動して暮らしている人々に拉致されてこき使われていた上流階級の娘を、偶然出会ったヴァイオリン弾きのチャーリーが救う。チャーリーは馬車を奪い、彼女を乗せて田園を逃げ、停車して一緒に暮らし始める。ある日、娘が水汲みに行くと、そこへ美男の画家が現れ、娘をモデルにしたがる。やがて彼は彼女に着想を得た作品を描いて、展覧会で賞を取った。その絵を見た娘の母親が、画家の案内によって娘と再会を果たす。娘は憧れの画家にも再び会え、親元にも戻れたので、高級車に乗って幸福感の中でチャーリーのもとを去る。ところが車中で、自分を救ってくれたチャーリーのことが本当は好きだったことに気付き、チャーリーを迎えに行き一緒に車に乗せる。本作では画家が悲恋の主人公ではない。画家は娘の美しさに着想を得て作品を完成させるが、娘に執心している様子はない。音楽家とは、自作の映画の音楽を自ら作曲し、ヴァイオリンなどの楽器を奏でることの出来たチャップリン本人にとって馴染みのある職業であったことであろう。この作品は、ミュージュアル時代に好んで作られたチャーリーがエドナを救う「ヒーローもの」の1作である。

第八節 職人・職人見習い

第一項 理髪師

ユニテッド・アーチスト時代の『チャップリンの独裁者』（1940年公開）では、主人公チャーリーは、架空の国トメニアの理髪師として登場する。第一次世界大戦で負傷し、記憶を失って長らく入院していたが、退院すると自分の理髪店で仕事を再開する。恋人もでき、ラジオから流れる音楽に合わせて客の髭を剃るなど楽しそうに仕事をしている。理髪店の主人は、言わば「一国一城の主」であり、人と対等に協力したりするチームワークをほとんど描かなかったチャップリンが好む職場環境であったと思われる、それが楽しそうに仕事をする姿に反映されている。

第二項 職人見習い

キーストン時代の『チャップリンとパン屋』（1914年10月26日公開）では、チャップリンはパン屋のウェイターとして登場するが、途中でパン職人たちがストライキをした為、臨時のパン職人となって働く。地面に落ちたパン粉を使ったり、女性たちといちやついたり、パン粉の袋を同僚の上に落としたりと労働態度は真面目ではない。エッサネイ時代の『チャップリンの仕事』（1915年6月21日公開）では、チャーリーは壁紙職人の見習いで、親方と荷物を乗せた重い荷車を引っ張って鞭打たれながら仕事場の家に行く。仕事の中にチャーリーは親方が乗っていた板の台の一方の端を肩に担いでいるが、ある拍子にそれを落とし、親方の顔にはバケツが被さり、ペンキだらけになってしまう。それを落とそうとチャーリーは正面からバケツでお湯をかける。更に作品終盤では、登場人物たちがドタバタの乱闘を繰り広げる中、チャーリーは刷毛で親方の顔にペンキを何度も塗る。やられたらただでは済まさないというチャーリーの特徴がここでも見られる。ミューチュアル時代の『チャップリンの伯爵』（1916年9月4日公開）ではチャーリーが仕立屋の見習いをしているが、婦人のウエストを測る際、後ろのマネキンごと測ったり、アイロンで焦がして服に穴を開けたりして解雇される。職人見習いの仕事はどれもあまり真面目に取り組んでいるようには見えない。これは、少年時代職を転々としていた際、様々な仕事の見習いを経験し、あまりものにならなかったことの反映と見る事が出来る¹⁰。

¹⁰ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳（新潮社、1966年）58－60頁。

第九節 工員

ユナイテッド・アーチスツ時代の『モダン・タイムス』（1936年公開）では、社長が監視カメラで労働者を監視しているような過酷な労働環境の工場で働くチャーリーが登場する。ベルトコンベアでボルトを締める流れ作業をし続けているうちに、作業を止めても手が仕事中と同じ動きをするようになる。やがてチャーリーは精神に異常を来し、工場内の機械を、笑いながら破壊して回る。そして精神病院に收容される。トイレにいるときまで、社長から監視されているという徹底的に管理されている職場環境で精神を病むチャーリーには、これまでの作品でみられていたような、上司が偉そうに振る舞えばやり返すという反骨精神は見られない。この作品で描かれている工場では、労働者が仕えているのは人間の上司ではなく機械なのである。人間らしい反骨精神で生き延びてきたチャーリーは、機械が支配する社会においては、狂人として病院に收容されてしまった。それでも病院から出て、工場の工員に戻ったり、デパートの警備員をしたりした後、カフェのボーイになり、そこで歌手のテストに受かるなど、自分らしく生きられそうな仕事を探していく。

本作品では、機械が人間を管理する環境では、人間的な人ほど精神を病む可能性があることを示している。

第十節 自営農

最初に農村での仕事が描かれていたのは、エッサネイ時代の『チャップリンの失恋』（1915年4月11日公開）である。放浪者のチャーリーが泥棒に襲われているエドナを助けると、エドナはチャーリーを家に招き、エドナの父親は農家の仕事を与える。そこでの労働ぶりは真面目ではなく、鋤の先で同僚の尻を刺したり、高いところから穀物の袋を下にいる同僚の上に落としたりしている。こうした行動は、同僚や親方がいる職場でのチャーリーの態度や振る舞いと似ている。

一方、ファースト・ナショナル時代の『犬の生活』（1918年公開）では、農村での暮らしは理想の生活として登場する。この作品ではチャーリーは失業者で、職業安定所に行っても、他の人たちに先を越されて窓口に行くことすらできず、時間が来て窓口が閉まってしまう。失意のうちに道路わきで座っていると、たくさんの犬たちにいじめられている一匹の犬を見かけ、その犬と自分を重ね合わせたチャーリーは、その犬を助けて一緒に暮らすようになる。犬と行ったミュージック・ホールで歌手のエドナと出会い、犬が拾ったお金を持って農村へ行き、チャーリーは大地を耕し、エドナと犬と幸せな生活をする。この作品では誰か

に雇われてはおらず、自営農である。誰かの命令で動いていないチャーリーは幸せそうに生き生きしている。『犬の生活』でチャーリーが麦藁帽を被って畑仕事をする姿には、他のどの職業の描写にも見られないほどの幸福感が漂っている。都会は失業などの苦しみを労働者に与えるが、農村の大地に根を下ろし、愛すべき人とともに暮らせば、人生は幸せと自由に満ち溢れるのだということを示している。

『サニーサイド』（1919年公開）では、チャーリーは農村のホテルで働いている。この作品ではホテルの経営者にこき使われているが、この時代の作品になるとそれ以前のようにやり返したりはしなくなる。そしてこの作品の中で、仕事の一環で牛たちを散歩に連れて行くときのチャーリーの姿が印象的だ。そのとき字幕に「彼の教会 一大空 彼の祭壇 一野原」(His church, The sky -his altar, the landscape.) という文字が出る。これはチャーリーにとっては、自然が宗教の様に人生を導いてくれる存在であるという意味を表していると考えられる。同じ時期に制作された『犬の生活』とならんで農村や自然が人に幸せをもたらしてくれるという考えが見て取れる。また、チャーリーは、一時的に都会から来た青年に恋人のエドナを奪われるが、最後に彼女は都会の青年よりも深い人間性をもったチャーリーを選ぶ。ここにもチャップリンの農村の都会に対する優越という価値観が見える。

ユナイテッド・アーチスツ時代の『巴里の女性』（1923年公開）では、農村からパリに出てきた女性が、都会での生活にもまれ、元恋人の自殺という悲劇を体験した後、その元恋人の母親と農村に戻り、孤児院を二人で始める。ヒロインの女性は麦藁帽子を被って、子供の手を引いて外へ出る。行き合わせた村人の馬が引く荷車に乗せてもらい、そのうちの一人がアコーディオンを弾きながら歌うのに耳を傾ける。そこへ、元恋人の死の原因になった三角関係のもう一人の男のパリの富豪がオープンカーで偶然通りかかり、あれよという間に、彼女が後ろに座っている荷車とすれ違って行ってしまふ。お互いにその存在には気が付かない。農村ののんびりとした生活に幸せそうなヒロインと、あつという間に農村という物質的にも精神的にも真の意味で豊かな環境を素通りして去ってゆくパリの金持ちとの対比を通して、チャップリンの「どちらが幸せだと思いますか」という声なき声が聞こえて来そうなラストである。

『モダン・タイムス』（1936年公開）にも、農村での幸福な暮らしが、ここでは空想の形で描かれる。工場をクビになり、誤認逮捕で刑務所にも入ったチャーリーだが、貧しい少女と出会い、協力し合って生きていく。チャーリーは娘にいつか家を持とうと夢を語り、理想の暮らしを空想する。そこは窓から手を伸ばせば木の実が取れ、口笛で呼べば牛が来て、牛乳が得られる。こぎれいな家でチャーリーは娘と暮らし、向かい合って座り、分厚いステー

キを食べる。ここにもやはり『犬の生活』以来の、農村で愛する人と暮らす幸せというテーマが見られる。

『チャップリンの独裁者』（1940年公開）にも幸せな農村の暮らしが描かれている。架空の国トメニアでは迫害から逃れるために、主人公の理髪師チャーリーの恋人ハンナを含むユダヤ人の人々が架空の隣国オストリッチのブドウ農園へと避難する。そこでハンナは麦藁帽子を被って、子供の手を引きブドウ畑を歩いて幸せな日々を過ごす。このブドウ園での描写は『巴里の女性』で麦藁帽子を被り、やはり子供の手を引くヒロインの姿と重なる。『巴里の女性』で都会に対する農村の豊かさを強調したチャップリンは『チャップリンの独裁者』でも農村を平和や幸福の象徴として描いた。

第十一節 職業描写の特徴

チャーリーが誰かと一緒に働く労働環境では、チャーリーは穏やかではない。また、誰かの下で働いている場合、始めは言うことを聞いて酷い目にあっているようであっても、いずれやり返す。溜まったストレスを、そのまま発散する。一方、自分一人で働く労働環境では生き生きとしていて、とても楽しそうである。チャップリンは自分自身が芸術家であり、映画監督としても指示する立場にあり、後者に近い労働環境に慣れているので、同僚や上司と協力してする仕事は好まなかったものと思われ、そのことがチャーリーの態度に反映されていると考えられる。

チャーリーが警察を煙に巻いたり、抑圧的な上司にやり返したりする姿は、日常は強い立場にない多くの庶民の観客の要請に応えたものであると考えられる。観客はチャーリーの側に立つことで、強くなった気分になり、暫し現実から解放される。警察や意地悪な上司などはこのような目的でチャップリン作品に登場している。一方、チャップリン自身が少年時代から経験してきた職業も幾つか描かれ、また映画や舞台なども描かれていた。それぞれの職業の描かれ方は、チャップリンが経験を通して、その職業に対して持っているイメージをそのまま反映していると考えられる。

第二章のように作品の中の職業をまとめていくと、最も幸せな生活と結びついて描かれていたのが、農村での生活や自営農という職業であることが分かった。チャップリンが一度も経験したことがないはずの農業が、最も理想的に描かれているのは何故なのだろうか。次の章では、作品から見て取れる農村の理想化について述べる。

第六章 チャップリンの農村理想化

第一節 モノと戦う

チャーリーがスイング・ドアと格闘する場面は初期の作品からあった。『アルコール先生お好みの気晴らし』（1914年3月16日公開）で、浮浪者と思しきチャーリーが安酒場のカウンターで酒を飲み、洗面所に行き、そこを出るとき、スイング・ドアがあり、押してもバネで跳ね返ってくるため、ドアが顔に当たって上手く通れない。何度かドアと格闘したのち、開けて出るのが諦め、スイング・ドアの下を潜ってカウンターのある方へと戻るシーンがある。初期のこの段階では、このドアと格闘するチャーリーの姿は観客を笑わせる役割しかないように思われる。次にこのスイング・ドアとの格闘が見られるのは『チャップリンの総理大臣』（1914年4月27日公開）で、チャーリーは貧民街のレストランのウェイターをしている。この作品では『アルコール先生お好みの気晴らし』の時の様に徹底して格闘してはいないが、人間を相手にするようにドアと喧嘩するチャーリーが見られる。

階段から滑り落ちる場面は、デビュー作である『成功争い』（1914年2月2日公開）から登場している。チャーリー以前の主人公でシルクハットにハの字髭の人物をチャップリンが演じているが、彼は人を騙したり、人の手柄を盗んだりして成功を勝ち得ようとする。新聞社に入社しようとして訪れたときには、そばにいた子供すら押し返して新聞社の入口に急ぐが、その際、階段で足を踏み外して転びそうになる。『雨に降られて』（1914年5月4日公開）では酔っぱらったチャーリーがホテルのロビーの奥の階段を昇ろうとして滑り落ちる。『アルコール先生ピアノの巻』（1914年11月7日公開）でピアノ運送業者をしているチャーリーは、届け先で同僚とアップライト・ピアノを横にして運び上げる際に、下から支え損ねて階段を滑り落ちる。これらはどれも、チャップリン映画のこの段階ではただのギャグの様に見える。

しかし『チャップリンの午前一時』（1916年8月7日公開）になると、モノと戦うチャーリーの姿がただのギャグには見えなくなる。この作品はそれまでのチャップリンの作品とは一線を画す作風で、喜劇の形態をとった「文明生活」の風刺劇である。チャーリーは、いつもと違い本作では正装をした紳士だが、冒頭から酔っている。タクシーで自宅まで帰ってくるが、まずタクシーの後部座席のドアの外に付けられているドアのノブの位置に上手く手が届かず、なかなかドアが開けられない。この冒頭にタクシーの運転手が出て来る他は、チャーリーの一人芝居となり、モノを相手に徹底したパントマイムを繰り広げる。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

まず、家に入ろうとするがドアが開かない。そこでチャーリーは窓から入り、家の中に置けばなしの鍵を取って来て、また窓から外に出てドアを開けて入り直す。家を出る段階でチャーリーは窓から出たのかもしれないが、鍵という道具も扱い方を間違えれば不便を生ずることを強調している。次に、ドアの前に置かれた足ふきに乗ってチャーリーは転倒しそうになる。これは、床がツルツルに磨かれており滑りやすくなっているからである。床を綺麗にすることは清潔で高級な生活を意味するのであろうが、滑るほど磨き上げることに對する批判が見て取れる。またコップに水を入れようとして、当時の水割りを作る時などに使うノズルの先から勢いよく水が出る容器を手にする。そしてコップに向けて噴射するが、ノズルの方向が上手く定まらず、水がコップに入らない。便利なはずの道具も使い方を間違えると不便であることが示される。回転テーブルの上の飲み物を取ろうとすると、上着が回転テーブルのある個所に引っかかり、そのせいで自分が動けばくるくる回り、どうしても飲み物が手に取れない。

更に、二階に通じる階段を昇ろうとしても、何度やっても上まで昇りきらない。階段もひどく酔っていたり体調が整わなかったりするときには簡単には昇れないことを示す。そして、階段脇にあったコートハンガーを木登りの様に伝って、ようやく二階にたどり着く。寝室に入り、今度は寝ようとするが、ベッドはボタン一つで壁が降りてきて設定される「自動ベッド」である。チャーリーがボタンを押すと勢いよく降りてきたベッドの下敷きになり、帽子も壊れてしまう。ベッドの上に寝ようとするとは今度は機械の調子が悪く、勝手に跳ね上がってしまう。それからベッドは上がったたり下がったりを繰り返し、チャーリーが押さえつけようとするとは底が抜けてしまう。チャーリーは結局、ベッドで寝ることを諦め、風呂で就寝する。

この作品は、人工物に囲まれた現代生活が、少し視点をずらせば不便も多く、特に最後の「自動ベッド」は機械が故障した時には何の役にも立たないばかりか大変不便であることを示しており、自動のモノに囲まれた生活を送っている現代にも通じるテーマである。後の『モダン・タイムス』（1936年公開）では、自動で食事をさせる機械が登場し、それが故障して、その実験台になったチャーリーが気絶する場面があり、便利なように見える自動の道具が実は不便であることも多いことを示唆しており、この作品のテーマを継承発展させたものと言える。

この『チャップリンの午前一時』以降でも、モノと戦うチャーリーは見られる。『チャップリンの伯爵』（1916年9月4日公開）と『街の灯』（1931年公開）ではつるつるの床で滑りそうになるシーンがある。前者は偽貴族のチャーリーが貴族の館でのパーティーに出席

する場面で、後者は富豪と知り合いになった浮浪者のチャーリーと一緒に連れて行かれた音楽やショーなども見せるレストランで的一幕で見られる。何れも高級感を追求し磨き上げすぎて滑りやすくなっている床を批判している。

さらに『一日の行楽』（1919年公開）でも、チャーリーはモノと争う。本作はチャーリーが父親で妻と二人の男児を自家用車の当時の大衆車T型フォードに乗せて休日を外で過ごす話だが、冒頭から自動車のエンジンがなかなかかからない。自動の道具はいったん調子が悪くなると不便なものに変わることが印象付けている。ようやく出発し、今度は家族が遊覧船に乗る。甲板でチャーリーは折り畳み椅子を広げて休もうとするが、椅子が上手く展開できず、何度やっても複雑な形になる。結局あきらめて、チャーリーは椅子を海に放り込む。また自家用車に戻って家族はドライブするが、交通整理が厳しく、なかなか十字路を通過できない。この作品では、人工のモノと人が作ったルールがかえって人の暮らしを不便にし、生活し辛くすることがあることを示している。

第二節 モノに呑まれる

『モダン・タイムス』（1936年公開）になると、チャーリーとモノとの関係は大きく変化する。これまで時々、モノと戦い、モノに困らされてきたチャーリーは、遂にモノに呑み込まれてしまう。この作品におけるチャーリーには、かつての様に同僚に八つ当たりしたり、抑圧的な上司にやり返したりする場面は見られない。工場内のベルトコンベアでボルトを締める仕事をしているチャーリーは、ハエが顔の周りを飛んでも、それを払っている暇もなく、体がかゆくなっても搔いている暇もない。次々にベルトコンベアの上で送られてくる部品のボルトを締める作業を繰り返している。ある時、ボルトを締め切れず、それを追いかけていくうち、機械に呑み込まれてしまい、巨大な歯車と歯車の間をチャーリーは移動する。同僚が機械を逆回転することでチャーリーは再びベルトコンベアの上に戻って来る。

上司や同僚といった対人関係のなかで展開する職業のときは、チャーリーはそれらの人々とやり合うことで元気に仕事をしていた。しかし機械の動きに合わせて作業するベルトコンベア・システム相手では、八つ当たりしたり、抵抗したりしても、人の様に反応しない。労働は人間がただ機械の一部の様になって働くことでのみ展開してゆく。『モダン・タイムス』以前のチャップリンの作品に見られた職業や労働は、どれも人間が道具を使って働く様子を描いたものであった。つまり一つの仕事において、あくまでも人間が主人公であった。しかしこの作品では工場という、言わば巨大な機械の塊が現れ、その中のどこか一部に人間が組み込まれて労働している。

工場の社長は社長室からモニターを通して工場各所の労働者の姿を監視することが可能となっており、マイクを通して工員に指示を出す。ベルトコンベアの手回し速度を速めるように命令したりもする。しかし、機械を介して工員と接している為、社長もまた機会の一部の様に見える。チャーリーも、この社長がチャーリーを自動で食事をさせる機械の実験台にしたときも、嘗て上司にやり返していた時の様な反骨精神は見せず、素直に言われるままになって、手は縛られ、機械が故障して暴走し、スープは服の上にこぼされ、ケーキは顔にぶつけられ、挙句の果てに、機械を売り込みに来たセールスマンの手でうっかり皿の上に乗せられた2個のナットを食わされる。最後は、口を拭く為の器械が止まらなくなり、何度も口にナプキンが激しくぶつかり、チャーリーは失神する。機械の一部になったチャーリーには人間らしく抵抗する意思がなくなってしまうようである。

このようなひどい目に会いながらも、チャーリーは文句ひとつ言わずベルトコンベアでボルトを締める仕事を続けるが、ベルトコンベアから離れても手はボルトを締める動きを止めないようになる。そして、ナットに似た形のものには何でも反応して、それをスパナで締めようとする。例えば、女性の服にナットと形の似た装飾品があれば女性も追いかける。無抵抗に機械の動きに合わせて仕事を続けていたチャーリーはついに、体の動きも精神もすっかり仕事の影響を受けた状態になってしまった。一種の職業病であると言えよう。女性を追いかけたことで警官に目を付けられたチャーリーは工場に駆け戻って来るが、今度は楽しそうに踊り、笑いながら機械を壊し始める。それを止めに入った同僚や社長の顔には黒いオイルを吹きかける。このときの同僚や社長に対する行動は、かつてのチャーリーがしていたような反骨精神からのものではない。深層心理においては或いはそうかもしれないが、直接には精神の均衡を失ったことから来ている。チャーリーはこの後、精神病院に収容される。

モノと戦っていたチャーリーは『モダン・タイムス』ではモノに呑まれる。機械の一部として働き、歯車の間を流れていく。精神に異常を来たさない限り、抵抗する意欲すらそがれている。チャップリンは実際にベルトコンベア・システムで働く人々が精神を病むという事実を知り、この作品を作ろうと考えた¹¹。徹底的に管理されたこの工場は、ITやAIが管理する今日の労働環境を先取りしている様でもあり、人間が無抵抗に機械の一部のようになって流れ作業をしている様子は、当時から現代まで通じる、巨大組織の中の一部になって働く人々の姿を象徴する様に見える。

『モダン・タイムス』で最初、工場で働いていたときのチャーリーはベルトコンベアの流

¹¹ チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳（新潮社、1966年）448頁。

れにそって働き、ベルトコンベアが速くなれば、それに合わせて早く動いて働いていた。換言すれば、自分で判断する余地を与えられていない環境で働いていたと言える。精神を病んで入院し、退院してから、今度は誤認逮捕で刑務所に収容される。そこを出ると、腹をすかしてパンを盗んだ、親を亡くした貧しい少女と出会う。チャーリーは自分がパンを盗んだと警察に言って、代わりに逮捕されようとするが、目撃者がいて少女が捕まる。チャーリーは刑務所の方が社会で生きていくより住み心地が良いと考え、わざと無銭飲食をして警察に捕まる。二人は護送車の中で再会するが、交通事故で護送車が転倒し、その隙に二人は逃げ出す。

走って逃れ着いた道の脇の芝生に二人で座って休んでいると、近くに一軒家があり、そこから仕事に行く夫と、それを送る妻の姿が見える。チャーリーは、自分たちも家を持ちたいと夢を語りだす。チャーリーは田園の一戸建ちの家で、窓のそばには木の実が茂っていて、乳牛も飼っている二人の暮らしである。食事ではテーブルに向き合って、分厚いステーキをフォークとナイフで切り分けておいしそうに食べる。チャーリーはこの後、少女の前で、家を持つことを目標に掲げることを明言する。工場でベルトコンベアの動きに合わせて手や体を動かしていた時分や、刑務所から出て、また刑務所に戻りたいといった考えを持っていた頃とは明らかに表情が変わって、明るく前向きになった。

この場面とそれ以前との違いは、チャーリーと一緒に協力して生きていきたい人、言わばパートナーが出来たことと、その人と幸せに暮らしていく為の、家を持つという具体的な目標が出来たことである。一緒にいることで幸せを感じられる異性と出会い、その人と一緒に幸せになりたいと考え、その為の目標を持ったのである。そして、人に言われるままに働くのではなく、人としていかに生きるべきかを考え始めたのだ。

第三節 工業から農業へ

『モダン・タイムス』以前には、モノと戦うチャーリーの姿があった。人間が作り出した道具は必ずしも生活を便利にはしない。使い方を間違えれば、何の役にも立たない。自動の器械は故障すれば生活に支障を来たす。そして『モダン・タイムス』に描かれたように、機械文明が巨大化し、機械の動きに合わせて人が生きるようになったとき、人間性が阻害される社会が実現する。

『モダン・タイムス』で、少女と出会ったチャーリーは、少女が見つけたあばら家で、しばし幸福な生活をする。仕事はないが大変幸せそうである。ある朝、チャーリーは新聞に目を通し、かつて解雇され、そののち不況で閉鎖された工場が再開したことを知る。チャーリー

一は少女に宣言した目標達成のため、一目散に仕事を求めて工場に行き、雇用される。目的を持ったチャーリーはとても労働意欲も高い。親方の下で工員として働くが、今度は親方が機械に呑み込まれてしまう。この物語後半で機械に呑み込まれたのがチャーリーでないことに注目すべきであろう。社会の「歯車」ではなく、目的意識をもって社会と向き合っているチャーリーはもう機械に呑み込まれない。しかし、この工場でストライキが起こり、仕事がまたなくなってしまう。

暫くして、少女が道で踊っているところをレストランの店長にその才能を認められ、雇われる。少女はチャーリーにも仕事を与えようと店長に紹介し、まずボーイとして雇われ、歌手としても雇われることが決まる。しかし少女が浮浪罪を犯しているとして警察が店に逮捕しに来たので、二人は一緒に逃げる。物語のラストではチャーリーと少女の二人が、朝、山に向かう一本道を並んで歩いていく。その先にチャーリーが見すえているものは、かつて少女の前で語った田園での幸せな暮らしであろう。

このラスト・シーンで注目すべきことは、都会で労働者の群の中では孤独だったチャーリーが、愛すべきパートナーを得て、自然に向かって歩いているということである。山に向かって進む、田園の生活を夢見るチャーリーとそのパートナーは、かつて『犬の生活』で描かれたような自営農になるかもしれない。『サニーサイド』や『巴里の女性』で描かれている様に物質的にも精神的にも真に豊かな田園生活を営む様にも感じられる。チャップリンの作品で、職業の描写において幸福感が如実に、また意識的に表現されたのは自営農や農村での職業だけであり、『モダン・タイムス』の幸福を求める二人もそういう暮らしに向かう様に感じられる。

結論

『モダン・タイムス』の廃屋で、チャーリーと貧しい少女と一緒に暮らしているとき、二人は仕事もお金もなかったが、幸せそうに暮らしていた。その幸福感はいったいどこから来るのか、それが本論文の出発点であった。それについて検証するために第一章ではチャップリンのフィルモグラフィーの流れを見直し、時代毎の作品の特徴を捉えた。そして、第二章ではチャップリンの作品中に登場する職業を、職種に分類して分析した。そして農村での生活や農業を仕事をしているとき幸福感が増してきて、都会よりも農村に幸福な生活の理想が現れていることを把握した。更に第三章で、チャップリンが一見便利そうに見える道具は使い方を間違えると不便であったり、害があったりし、また人間が機械に支配されるという

チャップリンの職業観（飯野友紀）

環境では、人は人間性を保てないことを警告していることが明らかとなった。したがって、文明が進化して、周囲に自動で便利な道具や機械が溢れている世界だからこそ、農村での生活や自然と向き合うことの重要性が強調されていたのである。その為に、作品の中では、農村で暮らすシーンが一番幸せそうに描かれ、農業が一番良い職業であるように描かれていたのだと考える。

『モダン・タイムス』の中の、チャーリーと少女が廃屋で一緒に暮らすシーンで、仕事やお金はなくてもこの上なく幸せそうに描かれていたのは、都会の生活の中でも、周りに家がなかったり工場で働かなくてよかったりするその生活が、農村での生活に少し近かったからであろうと考える。また、チャーリーが田園に家をもって、少女と自然に囲まれて暮らす目標を持ったからであった。人生には、愛すべきパートナーと、目標が大切であり、人類全体には、自然と向き合う生き方が必要である。

チャップリンの作品から彼の職業観を検証した結果、このようなチャップリンの幸福論に行き着いた。

参考資料一覧[引用文献一覧見出し]

チャールズ・チャップリン『チャップリン自伝』中野好夫訳 新潮社、1966年
岩崎昶『チャールズ・チャップリン』講談社、1973年
水川隆夫『チャップリンと現代』シネ・フロント社、1998年
大野裕之『CHAPLIN THE LOOTS』ハピネット社、2012年

チャップリン作品リスト

(公開年が日付まで記されている作品は、大野裕之『CHAPLIN THE ROOTS』ハピネット、2012年を参照して作成)
スタッフ・キャストの記述の後は、主人公の職業と仕事を記している。

キーストン時代

『成功争い』 MAKING A LIVING

1914年2月2日公開

監督 ヘンリー・レアマン

出演 チャールズ・チャップリン、ヘンリー・レアマン他

詐欺的性格の男（失業者、恋人を出し抜く、人の記事売り込みスクープをなす）

新聞社

チャップリンの職業観（飯野友紀）

『ヴェニスの子供自動車競走』 KID AUTO RACES AT VENICE, CAL.

1914年2月7日公開

監督 ヘンリー・レアマン

出演 チャールズ・チャップリン、ヘンリー・レアマン他

職業不詳（映画の撮影用のカメラに写りたがる目立ちたがり屋）

子供自動車レース場（＝記録映画撮影現場）

『メイベルのおかしな災難』 MABEL'S STRANGE PREDICAMENT

1914年2月9日公開

監督 メイベル・ノーマンド

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

職業不詳（酔漢）。

ホテル（ロビー、廊下、個室）

『泥棒を捕まえる人』 A THIEF CATCHER

1914年2月19日

監督 フォード・スターリング

出演 フォード・スターリング、チャールズ・チャップリン他

警察

犯罪者が潜入した地区

『夕立』 BETWEEN SHOWERS

1914年2月28日公開

監督 ヘンリー・レアマン

出演 チャールズ・チャップリン、フォード・スターリング他

職業不詳。

街路、公園。

『チャップリンの活動狂』 A FILM JOHNNIE

1914年3月2日公開

監督 ジョージ・ニコルズ

出演 チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル他

職業不詳。

映画館、撮影所。

『タンゴのもつれ』 TANGO TANGLES

チャップリンの職業観（飯野友紀）

1914年3月9日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、フォード・スターリング、ロスコー・アーバックル他

若い洒落者。

ダンスホール。

『アルコール先生お好みの気晴らし』 HIS FAVORITE PASTIME

1914年3月16日公開

監督 ジョージ・ニコルズ

出演 チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル、ペギー・ピアース他

職業不詳。酔漢。

酒場のカウンター、美女の車の止まっている街路、美女の家。

『痛ましの恋』 CRUEL, CRUEL LOVE

1914年3月26日公開

監督 ジョージ・ニコルズ

出演 チャールズ・チャップリン、ミンタ・ダーフィー他

独身の家令のいるブルジョワ紳士。

恋人のブルジョワ婦人の家、主人公の家。

『幻燈会』 THE STAR BOARDER

1914年4月4日公開

監督 ジョージ・ニコルズ

出演 チャールズ・チャップリン、ミンタ・ダーフィー他

職業不詳。下宿人。

賄いつき安宿。

『メイベルの身替り運転』 MABEL AT THE WHEEL

1914年4月18日公開

監督 メイベル・ノーマンド、マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

嫉妬深い悪漢。

サイクリングする道。レース場。

『恋の20分』 TWENTY MINUTES OF LOVE

1914年4月20日公開

チャップリンの職業観（飯野友紀）

監督 ジョゼフ・マダン（チャップリン研究家、大野裕之氏は、本作を、「実質的にはチャップリンの初監督作品」としている¹²⁾）

出演 チャールズ・チャップリン、ミンタ・ダーフィー他

掏摸。

公園（恋愛の舞台、掏摸の「仕事場」）。

『チャップリンの総理大臣』CAUGHT IN A CABARET

1914年4月27日公開

監督 メイベル・ノーマンド

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

カフェのボーイ。犬と散歩の偽ブルジョワ。スイング・ドアと格闘。

カフェ、メイベルの豪邸。

『雨に降られて』CAUGHT IN THE RAIN

1914年5月4日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、マック・スウェイン他

職業不詳。ホテル住まい。

公園。ホテル。

『多忙な一日』A BUSY DAY

1914年5月7日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、マック・スウェイン他

女形。

パレード。

『命取りの木槌』THE FATAL MALLET

1914年6月1日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

職業不詳。

公園。

『彼女の友人は詐欺師』HER FRIEND THE BANDIT（フィルムは現存せず）

¹² 大野裕之、『CHAPLIN THE ROOTS』（ハピネット、2012年）、33-34頁参照。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

1914年6月4日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

フィルムの実存は確認されていない作品。

『ノックアウト』THE KNOCKOUT

1914年6月11日公開

監督 マック・セネット

出演 ロスコ・アーバックル、ミンタ・ダーフィー、チャールズ・チャップリン他

ボクシングの試合のレフェリー。

ボクシング会場とその周辺。

『メイベルの多忙な一日』MABEL'S BUSY DAY

1914年6月13日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

職業不詳。

カーレース場。

『メイベルの結婚生活』MABEL'S MARRIED LIFE

1914年6月20日公開

監督 マック・セネット

出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

職業不詳。

公園、カウンター、アパート。

『笑いのガス』LAUGHING GAS

1914年7月9日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、フリッツ・シェイド他

歯医者の小間使い。

歯科病院。

『チャップリンの道具方』THE PROPERTY MAN

1914年8月1日公開

監督 チャールズ・チャップリン

チャップリンの職業観（飯野友紀）

出演 チャールズ・チャップリン、ジョゼフ・スウィックカード他
寄席の道具方。

寄席の会場。楽屋と客席。

『チャップリンの画工』 THE FACE ON THE BARROOM FLOOR

1914年8月10日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、セシル・アーノルド他

職業不詳、自称画家。

バーのカウンター。

『リクリエーション』 RECREATION

1914年8月13日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、チャールズ・ベネット他

職業不詳。

公園。

『男か女か』 THE MASQUERADER

1914年8月27日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル他

チャールズ・チャップリンその人（チャーリーに扮する）。

キーストン・スタジオ。

『チャップリンの新しい仕事』 HIS NEW PROFESSION

1914年8月31日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ジェス・ダンディ他

失業者。足を怪我している男の世話のアルバイトをする男。

公園。海辺の突堤。

『両夫婦』 THE ROUNDERS

1914年9月7日公開

監督 チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル

出演 チャールズ・チャップリン、ロスコー・アーバックル他

チャップリンの職業観（飯野友紀）

職業不詳ながら妻がおり、中産階級、酔漢。

アパート。レストラン。公園。

『新米用務員』THE NEW JANITOR

1914年9月24日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ジェス・ダンディ他
用務員。

会社に入るビル。

『恋の痛手』THOSE LOVE PANGS

1914年10月10日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、チェスター・コンクリン他
職業不詳。下宿人。

下宿、公園、映画館。

『チャップリンとパン屋』DOUGH AND DYNAMITE

1914年10月26日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、チェスター・コンクリン他
パン屋兼カフェの店員、臨時パン職人。

パン屋兼カフェ。

『アルコール自動車競走の巻』GENTLEMEN OF NERVE

1914年10月29日公開

監督 チャールズ・チャップリン、出演 チャールズ・チャップリン、マック・スウェイン、メイベル・ノーマンド他
観客。

自動車レース場。

『アルコール先生ピアノの巻』HIS MUSICAL CAREER

1914年11月7日公開

監督 チャールズ・チャップリン、出演 チャールズ・チャップリン、マック・スウェイン他
ピアノ運搬業者。

ピアノ屋、馬車で行く道、配達先の家。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

『他人のコート』 HIS TRYSTING PLACES

1914年11月9日公開

監督 チャールズ・チャップリン、出演 チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

妻も子もいる夫。家庭人。安定した職業がありそう。

家庭、カウンター、公園。

『夫婦交換騒動』 GETTING ACQUAINTED

1914年12月5日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、フィリス・アレン、マック・スウェイン他

夫。職業不詳。若い女好き。妻はおばさん。

公園。

『アルコール先生原始時代の巻』 HIS PREHISTORIC PAST

1914年12月7日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、マック・スウェイン他

失業者。

公園のベンチ。他の原始時代は夢の中。

『醜女の深情』 TILLIE'S PUNCTURED ROMANCE

「ロス・アンジェルス・プレミア1914年12月21日（それに先立って10月末にニューヨークの見本市で上映。）」

（大野、2012年、p. 60）

監督 マック・セネット（「チャールズ・ベネットが山岳シーンの監督をした」（大野、2012年、p. 60））

出演 ティリー・バンクス、マリー・ドレスラー、チャールズ・チャップリン、メイベル・ノーマンド他

詐欺師。

田舎。都市の街路。カフェ。富豪の館。

エッサネイ時代

エッサネイ社の「社名は、創設者の二人の名前、経営者のジョージ・K・スプアーと西部劇スター俳優G・M・アンダーソンの頭文字「S and A」に由来する。」（大野、2012年、p. 63）

『チャップリンの役者』 HIS NEW JOB

1915年2月1日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ベン・ターピン他

チャップリンの職業観（飯野友紀）

求職者。エキストラ。

映画撮影所。

『アルコール夜通し転宅』A NIGHT OUT

1915年2月15日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ベン・ターピン、バド・ジェミソン、エドナ・パーヴィアンス他
酔漢。

レストラン。

『チャップリンの拳闘』THE CHAMPION

1915年3月11日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
失業者、ボクサー。

ボクシング・ジム、試合会場。

『アルコール先生公園の巻』IN THE PARK

1915年3月18日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
掏摸。女好き。

公園。

『チャップリンの駆落』A JITNEY ELOPEMENT

1915年4月1日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
エドナの恋人。

エドナの家。T型フォードでカーチェイスする土の道。

『チャップリンの失恋』THE TRAMP

1915年4月11日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
浮浪者、失業者、エドナの父親経営の農村の手伝い。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

田舎の土の道。農村。

『アルコール先生海岸の巻』BY THE SEA

1915年4月29日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ビリー・アームストロング、マージー・ライガー、バド・ジェミソン、エドナ・パーヴィアンス他

職業不詳。喧嘩っ早い男。

風の強い海岸。

『彼の更生』HIS REGENERATION

監督 G.M.アンダーソン、少しだけ監督協力・脚本チャールズ・チャップリン

出演 G.M.アンダーソン、チャールズ・チャップリン他

カフェの客（カメオ出演）。

カフェ、女性宅。

『チャップリンの仕事』THE WORK

1915年6月21日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、チャールズ・インズリー、エドナ・パーヴィアンス他

壁紙職人見習い。

荷車を除荷される街路や坂道。フォード氏の家。

『チャップリンの女装』A WOMAN

1915年7月12日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

職業不詳。

公園、エドナの家。

『チャップリンの掃除番』THE BANK

1915年8月9日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

銀行の掃除夫。

銀行。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

『チャップリンの船乗り生活』 SHANGHAIED

1915年10月4日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

拉致されて働かされる船員。

海上の船。

『チャップリンの寄席見物』 A NIGHT IN THE SHOW

1915年11月20日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

レビューの客（一人二役）。

レビュー小屋。

『チャップリンの悔悟』 POLICE

1916年3月27日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

元囚人。

街路。エドナの家。

『チャップリンのカルメン』 BURLESQUE ON 'CARMEN'

1916年4月16日公開

監督 チャールズ・チャップリン/ レオ・ホワイト

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

カルメンに惚れる税関吏。

税関。

『三つ巴事件』 TRIPLE TROUBLE

1918年8月11日公開

監督 チャールズ・チャップリン/ レオ・ホワイト

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

使用人（ドイツの技師の）。エドナも使用人。

ナット邸。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

ミューチュアル時代

『チャップリンの替玉』 THE FLOORWALKER

1916年5月15日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エリック・キャンベル、エドナ・パーヴィアンス他
デパートの客、俄店長。
デパート。

『チャップリンの消防士』 THE FIREMAN

1916年6月12日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス、ロイド・ベイコン、エリック・キャンベル他
消防士。
消防署、火事の家。

『チャップリンの放浪者』 THE VAGABOND

1916年7月10日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エリック・キャンベル、エドナ・パーヴィアンス他
辻のヴァイオリン弾き。
カフェの中と外、馬車。

『チャップリンの午前一時』 ONE A.M.

1916年8月7日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、アルバート・オースティン
泥酔のブルジョワ男。
タクシー、主人公の家の室内。

『チャップリンの伯爵』 THE COUNT

1916年9月4日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス、エリック・キャンベル他
仕立屋の見習い。なりすまし伯爵。
仕立屋。マナーボックス夫人の家のパーティー。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

『チャップリンの質屋』THE PAWN SHOP

1916年10月2日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
質屋の（見習い？）店員。
質屋。

『チャップリンの舞台裏』BEHIND THE SCREEN

1916年11月13日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
映画撮影所の大道具、臨時の俳優。
映画撮影所。

『チャップリンのスケート』THE RINK

1916年12月4日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
カフェのウェイター。
カフェ、スケートリンク（ローラースケート）。

『チャップリンの勇敢』EASY STREET

1917年1月22日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
浮浪者、警官。
教会、治安の悪い街区。

『チャップリンの霊泉』THE CURE

1917年4月16日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
霊泉の客。
霊泉の施設。

チャップリンの職業観（飯野友紀）

『チャップリンの移民』 THE IMMIGRANT

1917年6月17日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
移民。（絵描きが救う）。

アメリカに向かう船。ニューヨークの食堂。

『チャップリンの冒険』 THE ADVENTURER

1917年10月22日公開

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
脱獄囚。

海岸。エドナの裕福な家庭。

ファースト・ナショナル時代

『犬の生活』 A DOG'S LIFE

1918年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
浮浪者、失業者、求職者、自営農。

街路。カフェ。農村。

『きづな』 THE BOND

1918年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、その他

『担え銃』 SHOULDER ARMS

1918年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス、シドニー・チャップリン他
陸軍の兵士。

軍事教練の場。（夢の中では、戦場）。

『サニーサイド』 SUNNYSIDE

1919年

チャップリンの職業観（飯野友紀）

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

農村のホテルの従業員。

農村。農村のホテル。

『一日の行楽』 A DAY'S PLEASURE

1919年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

一家の主人。（一軒のマイホームから出てくる）。

遊覧船。十字路。

『キッド』 THE KID

1921年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ジャッキー・クーガン、エドナ・パーヴィアンス他

浮浪者、ガラス屋。

公園。貧民街。

『のらくら』 THE IDLE CLASS

1921年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

職業不詳。偽ブルジョワ。

ゴルフ場。仮装舞踏会の社交場。

『給料日』 PAY DAY

1922年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他

大工。

建設現場。

『偽牧師』 THE PILGRIM

1922年

監督 チャールズ・チャップリン

チャップリンの職業観（飯野友紀）

出演 チャールズ・チャップリン、エドナ・パーヴィアンス他
脱獄囚。偽牧師。
ある農村。

ユナイテッド・アーチスト時代

『巴里の女性』A WOMAN OF PARIS

1923年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 エドナ・パーヴィアンス、ロドルフ・マンジュー

チャップリン出演せず。出てくる職業は、画家。パリ1番の金持ち。その愛人。
北フランスの田舎町とパリ。

『チャップリンの黄金狂時代』THE GOLD RUSH

1925年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ジョージア・ヘイル他

冒険家。本来の意味での山師。
アラスカの雪山。レストラン。

『サーカス』THE CIRCUS

1928年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、マーナ・ケネディ他

職業不詳の男。使用人。芸人。
サーカス団。

『街の灯』CITY LIGHTS

1931年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、バージニア・チェリル他

浮浪者。掃除夫。賭けのボクサー。花売り娘。
街路。清掃事務所。ボクシング会場。花屋。

『モダン・タイムス』MODERN TIMES

1936年

チャップリンの職業観（飯野友紀）

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ポーレット・ゴダード他

工場労働者。デパートの臨時の管理人。カフェの芸人。

工場。デパート。カフェ。

『チャップリンの独裁者』THE GREAT DICTATOR

1940年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ポーレット・ゴダード他

床屋。独裁者。

床屋。独裁者の執務室。

『チャップリンの殺人狂時代』MONSIEUR VERDOUX

1947年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、マリリン・ナッシュ他

犯罪者。

北フランス。南フランス。パリ。

『ライムライト』LIMELIGHT

1953年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、クレア・ブルーム、シドニー・チャップリン他

芸人。バレリーナ。

ロンドン、ボードヴィルの劇場。オペラ座等。

英国時代

『ニューヨークの王様』THE KING IN NEW YORK

1957年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 チャールズ・チャップリン、ドーン・アダムズ他

王様。

ニューヨーク。

『伯爵夫人』A COUNTESS FROM HONG KONG

チャップリンの職業観（飯野友紀）

1967年

監督 チャールズ・チャップリン

出演 ソフィア・ローレン、マーロン・ブランド、チャールズ・チャップリン他

外交官。

香港からアメリカへ向かう船上。